

日本英学史学会 中国・四国支部

ニューズレター

No.90

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

<エッセイ>

現代の「英学」

馬 本 勉

今年のノーベル平和賞に核兵器廃絶国際キャンペーン (International Campaign to Abolish Nuclear Weapons : ICAN) が選ばれた。7 月 7 日、国連において 122 ヶ国の賛成によって採択された核兵器禁止条約の成立に貢献した国際 NGO である。条約採択には、被爆者たちの長年にわたる地道な活動が大きな役割を果たし、それを讃える声が多く聞かれた。長崎市長はこの条約を「ヒロシマ・ナガサキ条約」と呼びたいと述べた。ヒロシマ・ナガサキの訴えを英語で発信し続けた被爆者の一人に、カナダ在住のサーロー節子 (Setsuko Thurlow) さんがいる。女学院中学 2 年のときに広島で被爆した彼女は、アメリカ留学を経てカナダへ移住。通訳を介さず、英語で原爆体験と核兵器廃絶を訴え続けてきた。2007 年にはカナダ勲章を受賞。世界各地で、様々なイベントで聴衆を前に語り、メディアのインタビューに答える彼女のメッセージは、ネット上の動画で広く配信されている。私も何度も見た。核兵器禁止条約が採択された後のスピーチは特に印象深い。彼女は次のように語っている。

“As we gather in our celebration of this extraordinary achievement, let us pause for a moment to feel the witness of those who perished in Hiroshima and Nagasaki. Both at that time in August of 1945, and over these 72 years, 100,000 of people, each person who died had a name. Each person was loved by someone. I've been waiting for this day for 7 decades. And I am overjoyed that it has finally arrived. This is a beginning of the end of nuclear weapons.”

“To the leaders of the countries across the world, I beseech you, if you love this planet, you will sign this treaty. Nuclear weapon has always been immoral. Now they are also illegal. Together let us go forth and change the world.”
(<http://www.dianuke.org/>より)

この言葉の裏にどれだけの思いが詰まっているのだろう。世界を動かそうとする強い意志を感じる。

私はしばしば、日本人による英語の発信を、「教材」になり得るかどうかという目で見ています。私と、私の教える学生の発信モデルとして。しかしその英語を真に教材化するには、話者の思いを十分に理解しなければならない。そうでなければ、学び手には何も伝わらない。

世界へ発信された日本人の英語。新渡戸稲造や岡倉天心など、英学史研究の対象とされ、かつ英語教材となった著作の例はいくらかもある。幕末明治期という時代の縛りを取り払えば、世界に向けて発信された「英語の言葉」に注目することは皆、「英学」の一つの姿だと言ってよいのかもしれない。やがて年月を経て、「英学史」の対象となるまで、ずっと読み継がれ、語り継がれていく。そんな言葉を探し、現代の「英学」として伝えていけたらと思う。

(県立広島大学／中国・四国支部副支部長・事務局長)

平成 29 年度 総会・第 1 回 (通算 76 回) 研究例会 報告



サテライトキャンパスひろしま 505 中講義室にて (2017.5.27.)

日本英学史学会中国・四国支部 平成 29 年度総会, 及び第 1 回 (通算第 76 回) 研究例会は以下の通り開催され, 盛会裏に終了いたしました (参加者 15 名)。ご参加くださいました皆様に, 心より厚くお礼申し上げます。

日 時: 2017 年 5 月 27 日 (土) 12:30 受付開始

会 場: サテライトキャンパスひろしま (広島県民文化センター) 505 中講義室 (5 階)

〒730-0051 広島県広島市中区大手町 1-5-3 TEL 082-258-3131

支部総会 (13:00~13:50)

支部長挨拶, 議長選出, 平成 28 年度活動報告・会計報告・会計監査報告, 会則改正,
平成 29・30 年度役員選出, 平成 29 年度活動計画

開会行事 (14:00~14:05) 支部長挨拶 竹中 龍範 (香川大学)

研究発表① (14:05~15:15)

「ヘルン先生とラジオ補習講座」

田中 正道 (広島大学名誉教授)

司会 鉄森 令子 (広島県立祇園北高等学校)

研究発表② (15:30~16:40)

「日本における英語基本語の史的検討 (1): 令文社『学習英語辞典』を手がかりに」

馬本 勉 (県立広島大学)

司会 河村 和也 (県立広島大学)

閉会行事 (16:45~17:00) 副支部長挨拶 松岡 博信 (安田女子大学)

懇 親 会 (17:30~19:30) 広島酒呑童子にて

研究発表①

「ヘルン先生とラジオ補習講座」

田中 正道 (広島大学名誉教授)



【発表を終えて】昭和6年から昭和13年まで日本放送協会関西支部（のち大阪中央放送局と改称）が関西エリアの高等教育機関に勤務していた教員を講師に迎え、旧制中学校4年生・5年生を対象に「ラジオ補習講座」という番組を放送していたことはあまり知られていない。大学時代にラフカディオ・ハーンに直接指導をうけたり、彼の作品等に強く感化された人物がこの番組の講師を務めていたことはさらに知られていない。本発表では番組初年度（昭和6年～昭和7年）のテキストをもとに、二人の講師、栗原基（英文解釈）ならびに上田畊甫（和文英訳）それぞれの人物像、講座内容を一瞥した。話題提供の機会を与えていただいたことに感謝している。

【参加者の感想】

◆大正14年（1925）に始まったラジオ放送において、英語講座が岡倉由三郎などを講師に開設された。昭和6年の第二放送開始と共に、関西（JOBK）の方でも補習講座が始まった。その講師が栗原基と上田畊甫のお二方、師弟コンビであったことを教えて頂いた。何とお二方とも、ヘルン先生に繋がる方々である。栗原基は東京帝大での小泉八雲の教え子であり、上田畊甫は広島高師時代栗原先生から教を受けた生徒であった。東京帝国大学で八雲の教を受けた人々が卒業後旧制広島高校や広島高等師範学校の教室で意欲的な英語教育（心の教育）を行ない、広島の英語教育の歴史に新たな伝統を築いたことは周知のことであるが、奇しくも、八雲の英語教育が放送メディアをも通じて西日本にあまねく伝播したことになる。新しい発見であった！ ご発表の中で驚いたことだが、上田畊甫が和文英訳の講座で八雲の“On Composition”（作文法）を引用して、the language of the people, 即ち the speech of the

streets に重きを置くべしと英作文の秘法を説いていることである。此处には、素晴らしい作文教授法を目指しつつも八雲の思いが恩師栗原を経て上田まで脈々と受け継がれていることに思わず感動を覚えずにはおれなかった。さらに田中先生は、明治36年と38年の『輔仁会雑誌』に発表された志賀直哉の「銃煙」に載る文章技法において、八雲の影響を受けた志賀が簡潔なる文体へと脱皮した経緯をも例示され、ご発表を締め括られた。まことに啓蒙的かつ説得的で、内容密度の濃いお話であった。<K. F>
◆いつもながら珍しい資料を発掘されてのご発表に関心を覚えました。特にラジオの語学講座については、NHK 自体に必ずしも多くの資料が残されている訳ではないようで、小生もいつごろだったか元NHKの宇佐美昇三氏から問い合わせを受けて手許にあるテキストをリストアップして回答したところ、個人でそんなに所蔵している人は珍しいとの御礼状をもらったほどなので、ましてやJOBKなど、各地方放送局の講座テキストとなると現存はいっそう少ないのではないかと思います。ぜひ、然るべき分析を加えて『英学史論叢』にご発表いただきたく、よろしく願いいたします。<Dragon>

◆「ラジオ補習講座」講師の上田畊甫と栗原基は師弟関係にあっただけでなく、ヘルンの教え子の栗原基の影響下で上田もヘルンの著作を読み、文章の要諦が brevity にあることなどを学んだというご指摘は大変興味深いものでした。志賀直哉も文章表現で悩んでいた時期に神田乃武にヘルンの作品を読むように勧められ、やはり brevity の重要性に気づき、作品で実践していったという事実も初めて知るところでほんとうに勉強になりました。ヘルンと志賀直哉との影響関係については、ご教示いただいた高橋一清の本を読んで一層の理解を深めたいと思っています。<E. Woodhouse>

◆一口に「ラジオ講座」と言っても、放送の時期や発信する局により、さまざまな形態のあったことがよくわかりました。JOBKでは第三高等学校や大阪外国語学校の教員が担当していたことを見ると、日本放送協会の黎明期にあつては全国的な放送内容の統制よりはむしろローカル色を活かす方針が採られていたものと考えられるように思いました。<KZ>
◆昭和6年に中央ではなく大阪のラジオで英語講座が放送されていた。しかもラフカディオ・ハーンの教え子栗原基も担当していたというから驚きです。どのような内容でどのような人たちが視聴し学んでいたのでしょうか。

上田畊甫「六十年の懐古」は広島の英学に関連し

た方たちのお名前がずらりとあり、とてもわくわくしました。今回も貴重な資料をどっさりとありがとうございました。<Rainbow>

◆昭和 6 年から 7 年かけ、「大阪発」のラジオ講座を担当したのが広島高師で教えた栗原基と、彼の教えを受けた上田畊甫であったことを大変興味深うかがいました。資料として配布されたテキストの「和文英訳」において、上田畊甫氏がハーンを引用しながら「質素簡単 (brevis) を主眼とすること」を唱えたことは、今なお私たちに訴えかけているように思います。引用されたハーンの講演 “On Composition” においては、the language of the people や the speech of the street を大切にしたいというメッセージがよく伝わってきます。「市井の人のことば」はそれだけ強く響く、ということでしょうか。当時はラジオに聴取料がかかったことや、ラジオのコールサインのことなど、関連した資料とフロアとのやりとりの中に、様々なヒントがありました。ありがとうございました。<Horse>



研究発表②

「日本における英語基本語の史的検討 (1) :

令文社『学習英語辞典』を手がかりに」

馬本 勉 (県立広島大学)



【発表概要】国会国立図書館で手にして以来、どれだけ古書市場を探しても手に入らなかった幻の辞書、令文社『学習英語辞典』の実物ですが、当たり前のように竹中龍範先生のご蔵書に含まれていました。今回、その実物をお借りすることができたのをきっかけに、著者や成立の経緯などについて調べを進めてみました。マイケル・ウェストが *General Service List* で示した「語義別頻度」を利用した(国内唯一かもしれない)学習英和辞書には、さまざまな工夫が凝らされています。多くの高校生に使われたのであろうことは分かってきましたが、なぜこれほどまでに入手が困難なのか不思議です。歴史上の周辺事情を探りながら、その理由を推測してみたいと思い

ます。この辞書が「幻」であったにしても、その特徴を明らかにして適切に評価することは、今後の英和辞典の発展に寄与する可能性を感じています。当日駆けつけてくださった松井孝志先生も、この辞書を所有する数少ない人のお一人です。竹中先生所蔵のものとは版の異なる実物を貸していただきました。今、私の手元に 2 点ある令文社の辞書について、今回頂戴した様々なご指摘やコメント踏まえ、評価を試みたいと思います。ありがとうございました。

【参加者の感想】

◆英語学習者のための英語基本語の選定に関しては長い歴史があり、これへの取り組みにかけては我が国は先進国でした。今回、馬本先生のご発表を拝聴し、「基本語」の考え方がいくつかあることを改めて思い出しました。同時に、誰のための基本語なのかという視点が決め手であると思いました。史的検討 (2) 以降を期待しています。<もみじまんじゅう>

◆令文社の『学習英語辞典』、及びその改訂版『ハイスクール英語辞典』が、学習英和辞典として稀有な試みを盛り込んだ辞書であることなど全く知らずにおりましたので、本日のご発表については語彙選定・語彙統制の観点からも、また、辞書学の観点からも興味をもって伺いました。ただ、その元となった M. West の *GSL* において語義を生起頻度によって分けている点は、遡れば *OED* ということになるのですが、截然と分けられるものかどうか気になるところです。この点は Palmer などでも、その *Grammar of English Words* において、例えば girl に=girl or woman in business office or shop との定義を与え、a shop [office] girl の例を与えていますが、この例が如実に表しているように、shop/office による修飾が無くても girl 自体にこのように定義される意味があると言えるのかどうか疑問に感じます。とまれ、戦後の出版でありながら入手困難な辞書とのもので、十分に分析されて『英学史論叢』にご発表いただければと願っております。

<Dragon>

◆令文社『学習英語辞典』とその新版『ハイスクール英語辞典』という辞書が存在したこと、その辞書が「幻の辞書」であることを初めて知りました。またこの辞書には単語の頻度を示す工夫が施されているばかりでなく、英語による定義があり、さらに例文を挙げることでその語の意味や用法を学生に理解させるという手法を採用している等のお話を伺いながら、*Longman Dictionary of Contemporary English* を連想しました。正確に言えば、*LDCE* の

出現以前にそれを凌ぐような学習辞書が日本人の手で作られていたことに驚きました。今後の調査研究を楽しみにしております。<E. Woodhouse>

◆「英単語の重要度は何によって判断するのか」、古今東西、多くの研究者たちもさまざまな「語彙選定方法」を研究してきた。そうした中で、この令文社の辞書は日本の高校生にとって理想的な辞書であったと思う。

・ソーンドイク等の語彙選定を基に日本の学生にあわせて5段階に区分されている。

・英語の頻度順を使った辞書はたくさんあるが、語義の頻度順を取り入れたものは少ない。

(初学者は未知の単語を辞書で調べると語義を考えず最初に出ているものを使う傾向がある。この辞書のように頻度順の語義や説明があると比較的適切な語義を選択できるのではなかろうか。)

・平易な英語で「語」を説明してあるので英語の感覚を習得できる。

このような夢の辞書をご紹介くださりありがとうございました。資料の辞書のコピーは理論を確認するために大変役に立ちました。しかし、なぜ、このような理想的な辞書が消えてしまったのか。優れているだけでは社会で生き延びていくことはできないのでしょうか。復刻を願うばかりです。<Rainbow>

◆令文社『学習英語辞典』という「幻の辞書」と出遇えたことの喜びがひしひしと伝わってきました。これまでのご研究を背景にされ、この辞書を世界の語彙選定の歴史の中にきちんと位置づけられたところに感服しました。発表後の質疑や情報提供も活発で、知のネットワークと呼ぶべきものを目の当たりにする思いがし、大いに刺激を受けました。<KZ>

【研究例会全体について】

◆参加者が余り多くなかったのは残念でしたが、2つの研究発表は共にとても興味深く、充実した例会であったと思います。<E. Woodhouse>

◆広島での開催にしては参加者数が寂しかったように思います。開催については、各年度の総会・第1回研究例会は毎年この時期を定例とし、会場も広島市内としておりますが、これはこの中国・四国支部が広島支部として発足したことによるもので、必ず踏襲すべき基本方針でもないという考え方もあろうかと思い、一度、会員にアンケート等を行って、もっと参加しやすい形があればそれを検討してみることがあってもよいのではないかと考えました。しかしながら、参加者数の問題は別して、研究発表後の質疑応答も活発になされ、例会としては活気のあるものとなっている点はやはり誇りとすべきかと思ひます。<Dragon>

◆アクセス抜群の会場、パーフェクトな運営、くつろいだ雰囲気懇親会、「最高で一す!」。

<もみじまんじゅう>

◆昨年春に続き、今回も発表させていただきました。まだ温めている最中のテーマですが、この機会にと思い、手を上げることにしました。十分な準備をして申し込むのが正しいのですが、研究を前進させるために発表するという考えもありだと思います。準備の「締め切り」は発表当日。後がなくなるのでいやでも進みます。準備は大変ですが、発表に手を挙げたことで多くの情報が集まり、得した気分になることもよく経験します。会員の皆様、ぜひ積極的に発表機会をご利用ください。私たちの会が、今後どう存在し得るか、考える時期にきています。ともに盛り上げていきましょう。<馬本>

中国・四国支部ニュース

>> 平成 29 年度支部総会

平成 29 年度支部総会は、5 月 27 日 (土) 午後 1 時より、第 1 回研究例会に先立って行われました。田村道美支部長による挨拶の後、議長として河村和也会員を選出し、以下の議題について審議を行い、すべて原案通り承認されました。

1. 平成 28 年度活動報告
2. 平成 28 年度会計報告
3. 平成 28 年度会計監査報告
4. 会則改正
5. 平成 29・30 年度役員選出
6. 平成 29 年度活動計画

1. 平成 28 年度活動報告

事務局より昨年度の活動について報告しました。内容は、(1)支部総会、(2)第 1 回研究例会 (広島)、(3)第 2 回研究例会 (倉敷)、(4)『英學史論叢』第 19 号の発行、(5)『ニューズレター』No.86~No.88 の発行、(6)理事会の開催(第 1 回、第 2 回)、の 6 項目です。詳細は『英學史論叢』第 20 号 (pp.60-63)をご参照ください。

※『英學史論叢』第 20 号に掲載の平成 28 年度活動報告中に謝りがありました (pp.61, 1 行目)。お詫び申し上げます、次の通り訂正いたします。

(誤) 通算 73 回 → (正) 通算 75 回

2. 平成 28 年度会計報告

収入の部		支出の部	
繰越金	305,513	通信費	19,702
年会費 (40 口, 内学生 1)	119,000	印刷費 (紀要, ニューズレター)	59,452
紀要掲載料	8,000	事務費	972
補助金	14,000	会議費	10,000
ゆうちょ銀行利子	11	事務用品	1,291
収入合計	446,524	支出合計	91,417
		次年度繰越金	355,107

以上, ご報告申し上げます。

2017 年 5 月 26 日 会計担当理事 鉄森 令子 ㊞

3. 平成 28 年度会計監査報告

各位

本学会の会計を, 収入並びに支出に関して, それぞれ関係書類及び領収書等により監査いたしました。

その結果, 会計報告の通り, 全て適正, 正確に会計処理ができていることを確認いたしました。

以上報告いたします。

2017 年 5 月 27 日 会計監査 堂鼻 康晴 ㊞
会計監査 平本 哲嗣 ㊞

4. 会則改正について

会則を改正し, 役員の職務や選出方法等について明記しました。また, 会則上定めなかった編集委員会について, 新たに編集委員会規程を設けました。さらに現行の査読・編集方針に沿った形で『英学史論叢』執筆要領・標準書式を改めています。新しい規程等は次の通りです。

日本英学史学会中国・四国支部会則

第 1 条 本会は日本英学史学会中国・四国支部（以下、本支部という）と称する。

第 2 条 本支部は日本の英学史に関する研究を行うことを目的とする。

第 3 条 本支部は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1 総 会
- 2 研究例会
- 3 その他必要と認められる事業

第 4 条 本支部は次の者をもって組織する。

- 1 日本英学史学会に所属する会員のうち本支部への入会を希望する者
- 2 その他本支部の趣旨に賛成し入会を希望する者

第 5 条 本支部に次の役職を置く。

- 1 支 部 長 1 名
- 2 副支部長 若干名
- 3 理 事 若干名

2. それぞれの役職の職務を次のとおり定める。

- 1 支部長は本支部の会務・活動を統括し, 支部を代表する。
- 2 副支部長は支部長を補佐し, 支部長に事ある時は内 1 名が支部長の職務を代行する。
- 3 理事は事務局長, 会計担当, 広報担当, 編集担当等の職務を兼ねて, 本支部の円滑な運営活動を支える。

第 6 条 支部長, 副支部長, 理事により役員会を構成する。

2. 役員会は第3条に定める事業目的を達成するために、会の運営その他の重要事項を審議する。
- 第7条 第5条に定める役職の選任は、現支部長の任期満了前の役員会において次期候補者を選出し、その内諾を得たうえで総会に報告し、その承認を経て行われる。
2. 支部長は理事の互選によりその内から選出するものとし、副支部長は支部長が理事の内から委嘱するものとする。
- 第8条 本支部に事務局を置き、理事1名が事務局長を兼ねる。
2. 事務局長は学会事務に関わる業務を統括する。
3. 事務局に学会事務の円滑な遂行のために幹事若干名を置く。
4. 幹事の選任に当たり、事務局長はこれを支部長に推薦し、支部長はこれを委嘱する。
- 第9条 本支部に編集委員会を置き、理事1名が編集委員長を兼ねる。
2. 編集委員会は別に定める本支部編集委員会規程により、本支部紀要『英學史論叢』の編集に当たる。
- 第10条 各役職及び幹事の任期は2年とする。但し再任を妨げない。
- 第11条 本支部に会計監査2名を置く。
2. 会計監査の選任に当たっては、支部長がこれを指名し、総会においてその承認を得る。
3. 会計監査の任期は2年とする。但し再任を妨げない。
- 第12条 本支部に顧問を置くことができる。
2. 顧問の推戴に当たっては、役員会がこれを推薦し、支部長が委嘱する。
- 第13条 総会は毎年1回、支部長がこれを招集する。
2. 総会を以て本支部の最高議決機関とする。
- 第14条 本支部の経費は第4条に定める者の会費および寄附金その他の収入による。
- 第15条 会費は1人年額3,000円とする。但し学生は2,000円とする。
2. 会費を2年間未納の場合は、会員資格を失う。
3. 顧問の会費についてはこれを徴収しない。
- 第16条 本支部の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。
- 第17条 本支部の会則は総会において出席者の3分の2以上の同意があればこれを変更することができる。

[附 則] 本会則は平成16年4月1日より施行する。これに伴い昭和52年11月10日より施行の「日本英学史学会広島支部」会則は廃止する。

平成19年4月1日 一部改訂

平成28年5月28日 一部改訂

平成29年5月27日 本会則を改正し、これを同年4月1日より施行する。

日本英学史学会中国・四国支部編集委員会規程

- 第1条 日本英学史学会中国・四国支部（以下、本支部という）に会則第9条の規定に基づいて編集委員会（以下、委員会という）を置く。
- 第2条 委員会は本支部理事によって構成され、委員長はその互選により選任される。
- 第3条 委員会に幹事1名を置く。幹事は委員長が指名し、支部長がこれを委嘱するものとする。
- 第4条 委員会は年に1回発行する本支部紀要『英學史論叢』の編集に係る業務を行う。
- 第5条 委員会は本支部支部長・副支部長・理事によって構成される審査委員に対して『英學史論叢』に投稿された論文の査読を依頼する。
2. 投稿論文の分野・内容によっては審査委員以外の本支部会員、若しくは日本英学史学会本部及び同学会他支部会員に査読を依頼することがある。
3. 前項の本部及び他支部会員に査読を依頼する場合には支部会計より相応の謝礼を支払うものとする。

[附 則] 本規程は平成29年5月27日にこれを定め、同年4月1日より施行する。

『英學史論叢』 執筆要領

1. 『英學史論叢』に載録するものは研究論考・研究ノートおよびその他のものとする。いずれも未発表のものに限る。
2. 研究論考・研究ノート、その他のものとも、標準書式に従った完全原稿をパソコン等を用いて作成し、プリントアウトして提出するものとする。執筆者による校正は行わない。
3. 研究論考・研究ノートは日本英学史学会中国・四国支部研究例会、日本英学史学会本部月例会および全国大会、ならびに他支部研究例会における口頭発表をまとめたものとする。これによらない投稿論文も受理することがある。いずれも正副3通を提出するものとし、正本1部には著者名を明記し、副本2部には著者名を伏せる。
4. 研究論考・研究ノートは参考文献・資料・図版等を含め、10ページ以内とする。
5. 掲載決定後の最終原稿は、修正を求められている場合はそれに対応した上で、プリントアウトしたもの及びデジタルデータを提出する。原稿は提出されたものをそのまま印刷するものとし、したがって、執筆者による校正は行わない。
6. 研究論考・研究ノートの掲載料は1編につき3,000円とする。ページ数を超過した場合は、1ページにつき1,000円の追加掲載料を負担するものとする。学生会員については、規定ページ数以内の場合は掲載料を免除する。但し、ページ数超過の場合は、超過分について1ページ当たり1,000円を負担する。
7. その他のものについては、英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等とする。これについては会員の投稿および編集委員会の執筆依頼によるものとし、いずれも原則として2ページ以内とする。なお、新刊書評・紹介は日本英学史学会中国・四国支部会員の著書ならびに中国・四国支部の活動に関わる著作を取り上げるものとする。

『英學史論叢』 標準書式

1. 用紙はB5判白紙を用い、上部および下部に25mm、左右に20mm、それぞれ余白をとる。
2. 本文は、10.5ポイント文字を使用し、1行あたり38文字、1ページ38行の書式によって作成する。フォントは、和文は明朝体、欧文はCenturyを用いる。和文中の読点は「、」（全角コンマ）とし、和文・欧文を問わず、英字・数字はすべて半角文字とする。
3. 本文第1ページに論文タイトル、執筆者名を記す。論文タイトルは18～22ポイント文字を使用し、中央に置く。執筆者名は本文と同じ大きさの文字を用いて、右に寄せて記す。第1ページには、タイトル、執筆者名に続いて、30行を本文（見出しを含む）にあてる。なお、論文末に、右に寄せて、執筆者の所属をカッコに入れて示すこととする。
4. 本文中の見出しについては前節との間を1行アキとし、番号を付してゴシック体とする。但し、見出し中に欧文が含まれる場合にはそのフォントをArialとする。
5. 注は、尾注とし、本文中に右肩数字によって注のあることを明記する。
6. 参考文献は論文末に一括して示す。

5. 平成29・30年度支部役員

支 部 長：竹中 龍範
副支部長：上杉 進、馬本 勉、松岡 博信
顧問(相談役)：小篠 敏明、田村 道美
顧 問：五十嵐 二郎、小泉 凡、田中 正道
理 事：河村 和也、鉄森 令子、中舛 俊宏
能登原 祥之、保坂 芳男、山田 昌宏
事務局長：馬本 勉
会計監査：野村 勝美、平本 哲嗣
幹 事：堂鼻 康晴、藤本 文昭

6. 平成28年度活動計画

1) 研究例会

- ・第1回 平成29年5月27日(土)
広島市・サテライトキャンパスひろしまにて。
例会当日、理事会および支部総会を開催。
(予定通り終了)
- ・第2回 平成29年12月9日(土)
高松市・香川大学教育学部にて。
例会当日、理事会を開催予定。

2) 支部研究紀要『英学史論叢』第20号

(2017年5月27日発行)

研究論考(2編)

- ・松山時代の漱石—英語教師夏目金之助の実像—
(竹中龍範)
- ・助動詞「た(だ)」の英・仏語訳をめぐって
—『出家とその弟子』とその英仏訳本からの考察—
(野村勝美)

研究ノート(1編)

- ・3種のThe Lotus Libraryについて(田村道美)

3) ニューズレター

No.89(平成29年5月, 発行済み)

No.90(本号), No.91(年度内に発行予定)

>> 平成29年度第1回理事会

第1回理事会は、支部総会に先立って行われ、総会における審議内容の確認、ならびに平成29年度第2回研究例会の計画を確認しました(出席者5名)。

規程改正、役員改選など、これからの支部運営をめぐって、様々な議論を行いました。特に、理事の役割分担によって事務局の負担軽減を行うことや、黒字の続く支部会計については積極的な予算の運用を検討することなどを協議しました。

>> 新入会員

田中 美穂(たなか みほ) 津山洋学資料館

英学史学会全国ニュース

>> 第54回全国大会

2017年10月21日(土)・22日(日), 杏林大学井の頭キャンパス(東京都三鷹市)において開催されました。

(本支部会員による発表)

安部規子「杉森此馬の英国留学—平田禿木との交流を中心に」

>> 『英学史研究』第50号

2017年10月1日発行

(論文)『竹取物語』はいかに英訳されたか—F. V. デイキンズと南方熊楠との関わり(岩上はるか)ほか

>> 『日本英学史学会報』No.143

2017年10月1日発行

巻頭言 全国大会にあたって(楠家 重敏)

《特別寄稿》

- ・フランスと日本語教育(小島 優里)
《英学史散策》
- ・マドンナのモデルは、女医?(大前 義幸)
《新刊紹介》
- ・吉村侑久代『イギリス生まれの日本文学研究者
R. H. ブライス(Reginald Blyth)一足跡と業績』
(速川 和男)
- ・染村絢子『ラフカディオ・ハーンと六人の日本人』
(速川 和男)
《英学史手帖》
- ・夏目漱石翻訳書展(菅 紀子)
《資料の紹介》
- ・漱石生誕150周年記念

『世界で翻訳された夏目漱石作品展』(菅 紀子)

『ラジオシンポジウム「漱石のSEKAI」』(菅 紀子)

- ※ 日本英学史学会(本部)の会員登録には、中国・四国支部とは別に手続きが必要です。詳細は学会ウェブサイトをご覧ください。
- ※ 『英学史研究』, 『日本英学史学会報』の閲覧希望は、支部事務局までお知らせください。

英学史情報ひろば

◇ 八雲会編『へるん』第54号(2017)

- ・小泉凡「生まれ変わった小泉八雲記念館から」
(pp.68-71.)
- ・風呂 鞏「『ゲーテ記念館』に非ずして『ゲーテの記念館』!!」(pp.72-73.)
- ・風呂 鞏「ヘルン友の会々誌『凡』の復刊を願う」
(pp.104-106.)
- ・風呂 鞏「紹介・出雲民藝紙『耳無芳一』
(原作:小泉八雲, 紙漉:安部信一郎, 平成28年)
(pp.113-115.)

◇ 『日本英語教育史研究』第32号(2017)

- ・竹中龍範「師範学校生徒による小学校英語科教育実習:明治末年における一事例」(pp.1-24.)

◇ The Cornerstones 38 (2017, 北海道教育大学函館校英語同窓会)

- ・五十嵐二郎「人間理解を目指す英語教育—Adapt, Adapt, Adept—」(pp.2-4)

◇ 英語世界への誘い:ハーンと南日恒太郎(2017年10月14日, 富山八雲会)

- ・江利川春雄「英語教育におけるラフカディオ・ハーンと南日恒太郎」(講演)

支部会員の皆さまによる著書, 論文, エッセイ, 講演, 研究発表や, 英学史に関係する資料等の情報をお寄せください。

日本英学史学会 中国・四国支部
平成 29 年度 第 2 回 (通算 77 回) 研究例会 (高松研究例会) のご案内

日 時： 2017 年 12 月 9 日 (土) 13:30 受付開始
会 場： 香川大学教育学部 631 教室 (6 号館 3 階)
〒760-8522 高松市幸町 1-1
電話：(087) 832-1523 (竹中研究室)
参加費： 会員，非会員とも無料

本年度第 2 回 (通算第 77 回) 研究例会を，12 月 9 日 (土)，香川大学教育学部 (香川県高松市) にて開催いたします。開催にあたり，支部長の竹中龍範先生に格別のご配慮を賜りました。篤くお礼申し上げます。

今回の研究例会では，今年度春まで支部長をお務めくださった田村道美先生 (顧問・相談役)，ならびに新支部長の竹中龍範先生にご講演をいただきます。会員の皆様には，ぜひ高松の地にご参集いただきますよう，ご案内申し上げます。

研究例会のあとには，忘年懇親会を企画いたしております。こちらの方へも多くの皆様のご参加をお待ちしております。

<< 研究例会プログラム >>

開会行事 (14:00～14:05) 支部長挨拶

講 演 ① (14:05～15:15)

日本における *Pride and Prejudice* の受容 一漱石，豊一郎，弥生子を中心に一
田村 道美 (香川大学名誉教授)

講 演 ② (15:30～16:40)

英学史・英語教育史研究に魅せられて
竹中 龍範 (香川大学)

閉会行事 (16:45～17:00) 副支部長挨拶，写真撮影

忘年懇親会 (18:00～)

会場： 庄や高松駅前店 (JR 高松駅に隣接)
〒760-1011 高松市浜ノ町 1-55 電話：(087) 823-0581
会費： 5,000 円

備 考：

例会当日 (12 月 9 日)，香川大学と法人契約を結んでいる「川六エルステージ」に宿泊をご希望の方は，「香川大学・竹中龍範先生のもとで開催される学会に参加」することを伝え，各自で予約してください。割引が適用されます。(電話：087-821-5666)

ただし，上記ホテルを含め，高松市内のホテルはとりにくい状態となっております。宿泊予定の方は，各自で早めにご手配されることをおすすめします。

高松例会のご出欠について

※ 例会および懇親会のご出欠をお知らせください。同封の参加申込用紙の内容について、11月30日(木)までに、メール、ファックス、郵送のいずれかでご回答くださいますよう、お願いいたします。

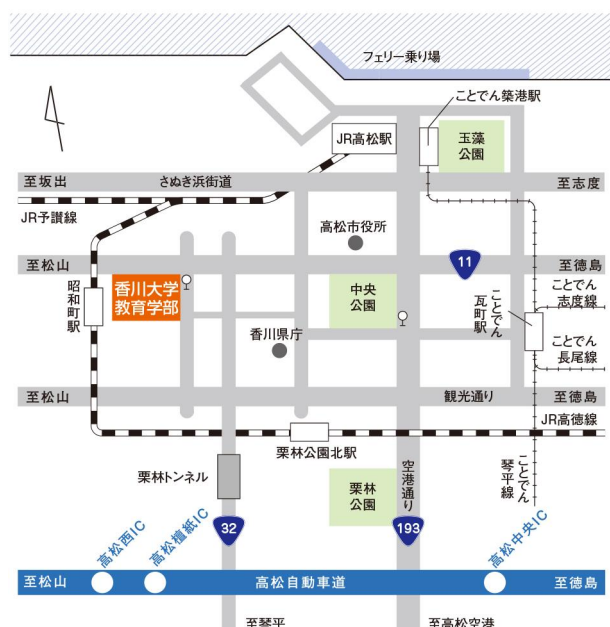
事務局連絡先 メールアドレス: eigaku@tom.edisc.jp

FAX番号: (0824) 74-1725

郵送先: 〒727-0023 広島県 庄原市七塚町 5562 県立広島大学 馬本研究室
日本英学史学会 中国・四国支部事務局

※ 当日12:00より、役員会を開催します(役員会は、支部長、副支部長、理事により構成)。
会場は、香川大学教育学部 外国語資料室(英語資料室) <5号館3階エレベータホール左横> です。
役員会構成員の皆様は、こちらのご出欠も合わせてお知らせください。

交通のご案内 (香川大学教育学部 HP <http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/access/access.html> より)



JR 高松駅より

JR 高徳線:
「高松駅」→「昭和町駅」下車 徒歩5分

タクシー:
JR 高松駅→香川大学 約10分 約800円

徒歩: 約20分



キャンパス案内図

研究例会の会場は、
正門をいって右手側
12番の建物です。

理事会の会場は、
その隣、11番です。

中国・四国支部事務局より

>> 年会費納入のお礼とお願い

すでに多数の会員の皆様より今年度の会費（一般 3,000 円、学生 2,000 円）をご納入頂いております。ご協力に感謝申し上げます。これからお振込みの方は下記口座までよろしくお願いいたします。

ゆうちょ銀行「振替払込用紙」を用いる場合
（口座番号）01360-9-43877
（加入者名称）日本英学史学会 中国・四国支部

他の金融機関から振込む場合
（店名）一三九（イサノキョウ）店（139）
（口座番号）当座 0043877
（加入者名称）日本英学史学会 中国・四国支部

>> 紀要の配付と販売について

研究紀要『英学史論叢』は、会員の方へ一部ずつ、研究論考・研究ノート執筆者には所定の部数をお渡ししています。最新号やバックナンバーをご希望の方には、一部 1,000 円（非会員 1,500 円）にて販売いたします（郵送料込）。詳細は事務局まで。

バックナンバー収載の研究論考等のタイトルは、支部ウェブサイトにてご確認ください。

『英学史會報』『英学史論叢』所収論考一覧 URL
<http://tom.edisc.jp/eigaku/bulletin/eigakushi-kaiho-ronso.htm>

>> 『英学史論叢』第 21 号原稿募集

日本英学史学会中国・四国支部研究紀要『英学史論叢』第 21 号（2018 年 5 月発行予定）にぜひ多数のご投稿をお願いいたします。

研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

・ご投稿に際しては、本ニューズレター p.8 に掲載の「執筆要領」および「標準書式」に従ってください。

・標準書式に整えたファイル（テンプレート）をご希望の方は、事務局までお知らせください。

メール：eigaku@tom.edisc.jp

ファックス：0824-74-1725

・原稿提出の締切は、**2018 年 2 月 20 日**（消印

有効）です。事務局まで郵送してください。

・研究論考・研究ノートは、正副計 3 部をお送りください。正本 1 部にのみ著者名を明記し、副本 2 部には著者名を伏せてください。

・英学史随想、書評等は 1 部お送りください。

広島英学史の周辺(56) 平成 17 年 2 月、ニューズレター No.41 のこの欄「広島英学史の周辺(7)」に次のことを記している。

tsunami の初出がハーン作品だということを昨年末の天声人語で知りました。OED の初版には登場しませんが、Supplement の第 4 巻に 1897 年の *Gleanings in Buddha-Fields* からの引用があります。“A Living God” の一節でした。

大震災の 6 年前。スマトラ沖地震による津波で多くの人が犠牲になり、tsunami に注目が集まった頃だ。▼この語を最初に英文で発信したのはハーンと思っていたが、大学の研究誌に「シルモアは、『津波』という言葉が英語になるきっかけとなった記事を書いた人」という一節を見つけた（天野みゆき『『不朽の島』への憧憬：エリザ・シドモアと宮島』『宮島学センター年報』(第 3・4 号) 2013 年、県立広島大学）。ハーンが着想を得たのと同じ、1896 年 6 月の明治三陸地震について、同年 9 月に書いた記事という。▼このことは、第 161 回「広島ラフカディオ・ハーンの会」ニュース（2013. 1. 11 発行）で既に取り上げられており、私の読んだ一節の元となった「紀行作家シドモア写真展」（宮島歴史民俗資料館）のことや、インターネット上の *National Geographic* 誌に言及してある。ハーン作品は「厳密にはシドモアの一年後である。OED 編纂者の意見を聞く必要もあろう」と記し、「シドモア復権を考慮すべき日が来るのではあるまいか」と結んでいる。ハーンに関わる情報を具に集めておられる風呂先生ならではの記述に感動を覚えた。▼私は縁あって、今年から「宮島観光学入門（英語）」という授業に関わっている。上の「不朽の島」をはじめ、安芸の宮島にも「英学の気(け)」が溢れている予感がする。調べを進めてみたい。▼では皆様、高松でお会いしましょう。(馬)

日本英学史学会中国・四国支部ニューズレター No.90

2017 年 11 月 23 日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部（代表 竹中 龍範）

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562

県立広島大学 馬本研究室内

電話&FAX: 0824-74-1725 (研究室直通)

e-mail: eigaku@tom.edisc.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.90 November 23, 2017